

## ■ シンポジウム報告 ■

## 学校は病んでいるか ーいじめ・不登校問題を考えるー

司 会	明石 要一 (千葉大学)
	耳塚 寛明 (お茶の水女子大学)
シンポジスト	秦 政春 (福岡教育大学)
	酒井 朗 (お茶の水女子大学)
	保坂 亨 (千葉大学)
指定討論者	小川 幸男 (品川区立八潮中学校)
	山口 宏昭 (東京新聞社)
	土屋 玲子 (スクール・カウンセラー)

本大会の公開シンポジウム「学校は病んでいるかーいじめ・不登校問題を考えるー」は、10月12日（日）千葉大学のけやき会館で開催された。

今日ほど学校が社会の注目を浴びていることはない。しかも、それはきわめて批判的な眼差しである。学校は制度疲労を起こしているという。そして、その制度疲労は個別の学校に対してでなくして、構造的なものとしてみられる。学校に対する異常なまでの関心はなぜ生まれてくるのか。その社会的な背景を明らかにしたい。そこで私たちは「学校は果たして病んでいるか」という視点から、学校が抱えている問題を解き明かしてみたいと思い、具体的には、いじめ・不登校問題に焦点をあてた。

司会は耳塚寛明（お茶の水女子大学）、明石要一（千葉大学）の両氏、報告者は秦政春（福岡教育大学）、酒井 朗（お茶の水女子大学）、保坂 亨（千葉大学）、小川幸男（品川区立八潮中学校）の4氏であった。そして、指定討論者は山口宏

昭（東京新聞社）、土屋玲子（スクール・カウンセラー）の2氏であった。

秦氏は、「教育社会学の立場から」と題して豊富な計量的データに基づき、子どもにストレスがたまっている事実を指摘した。そして、子どもにストレスがたまっているから問題行動が生まれる、という。しかも教師側にもストレスがたまり、暴発的（体罰等）指導が行われ子どもに悪影響をおこしているとみる。それを受けた子どもがさらに問題行動をおこす。こうした悪循環が問題だと説いた。

酒井氏の報告は、「学校臨床学の立場から」と題して、「学校が病んでいる」といった問題の語られ方（言説）が問題の本質を見えなくしている。いま必要なことは既存の筋立てを頭から受け入れるのではなく相対化することで見直し、事実の整合性のある筋立てをつくることであると主張する。そして今日の学校や生徒をめぐるさまざまな問題が生じている原因は、学校と社会の関係にずれが生じていることであるといい、関係性の問題と

してとらえる視点の重要性を説いた。

保坂氏の報告は、「臨床心理学の立場から」と題して、教育相談の介入対象が問題をもつ子ども個人から子どもと教師関係、生活の場である学校体系へと拡大しつつあることを指摘した。しかし、現実には学校の問題としてフィードバックしたり、学校へ介入することは十分に行われてはいない、と主張する。しかし、現実の不登校問題は受験や管理といった教育状況で説明するか、過保護・父親不在などの家庭の問題と捉える説明がある、のみであるとした。

小川氏の報告は、「現場教師の立場から」と題して、学校で生じる問題の原因は教師と生徒関係が変化してきたからである、と指摘した。具体的には、学校・教師の権威が低下してきたためにいじめや不登校が生まれる、という。そこで教師・生徒の関係のなかで管理的な対応に代わるものとして、契約的な役割関係を確立すべきだ、と提案した。

その後2人の指定討論者とフロアを含めて活発な議論がなされた。その結果、粗くわけて秦氏の計量的な立場からの原因を解明するアプローチと、酒井氏、保坂氏、小川氏のように「関係性」から問題を捉え直す立場の違いがクローズアップされた。

秦氏は、問題行動発生のメカニズムとして教師と子どものストレスの「悪循環」論を唱えた。それへの対応策の一つとして教師の管理と抑圧があるとする。

これに対して「関係性」を強調する立場から、例えば小川氏は教師と生徒と関係を保つためには教師の権威が必要であ

る、という。そしてその権威は教師と生徒との間での契約関係づくりから生まれると提案する。

多くの教師は「保護-依存」的な関係を求めるが、中学生になってその関係がうまく行かなくなったとき「支配-服従」の関係に転化する。それに変わる関係性として生徒-教師が対等な関係を考える。ただし、この契約的な関係づくりは、社会の維持のための役割としての権力関係を両者で契約しようとするものである。

このシンポジウムで提起されたもう一つの論点は小学校と中学校の文化の違いである。①中学校でいきなり厳しすぎるからいけない。②小学校が優しすぎる。高学年はもっと保護的立場から離れて社会化をすすめるべきだ。

この二つの文化的なギャップがある。論の方向性としては②の立場が主流を占めた。小学校の低学年では子どもたちはうまく学校に適応している。問題が起こるのは高学年からである。それはこの時期における教師と子どもの関係のあり方に問題があるのではなかろうか、と主張する。高学年から保護的な立場を緩やかにして中学校とのギャップを少なくさせる必要がある。その一つとして、学校における通過儀礼を見直してもよいのではないか、という意見が出た。

今回のシンポジウムを通して学校が抱える問題を解明するアプローチの違いが鮮明にされ、子どもと教師、学校と社会の関係性をどうつくりあげていくかが見えてきたことが成果であったといえる。参加者は250名を越える盛況であった。

(文責：明石要一)